

大島幹雄著

## 『サーカスは私の(大学)だった』

1979年春に大学を卒業した著者は、ソ連・東欧からアーティストを招聘する会社に就職する。とはいえ、大学院に進学してロシア演劇研究者となる夢は捨ててはおらず、腰かけのつもりであった。そして七月、「国立ポリシヨイ舞台サーカス」とともに三カ月にわたり全国を旅する仕事をあてがわれる。仕事は厳しく、なかでも熊の餌の手配は大変であった。

港では熊との別れを惜しみ涙するまでになつていった。かくして、30数年を経た今も続いている著者とサーカスとの付き合いが始まる。

その後、著者はサーカスの招聘やプロデュース

だ。「ポリシヨイ・サーカス」や「東ドイツ動物サーカス」のような名だたるサーカスだけでない。カザフスタンやサハのサーカス、韓国の伝統的綱

ンゴル、中国、ウスベキスタンその他へ出かけ優れた芸人を次々と見いだしていく著者の行動力と慧眼には、感服するほかない。

なかでも、クラウンの芸と笑いの世界に対する

ほかに、海外へ渡つた日本のサーカス芸人にまつわる話や、大道芸とのかかわりなど、本書には、サーカスとその周辺に関する興味深い話がたっぷりと詰めこまれている。

## 熊との別れを惜しみ涙する

に携わる一方、『サーカスと革命』(1990)を皮切りに研究と執筆面でも活躍していくこととなる。

本書のなかに出てくるサーカスはじつに多彩

著者の愛着は格別で、知られざるクラウンを世界各地で発掘していく。また、クラウンならなくても、

こぶし書房、13年2月、1800円十税  
桑野隆(早稲田大学教授)



大島幹雄  
サーカス  
子だった

ところが著者はこの巡業の間にサーカスにすっかり魅入られてしまい、横浜

書評

ヨローッパ、あるいはモ

地を訪ねて交渉し日本に招聘したものである。ロシアをはじめアメリカ、

の多くにはおのずと笑いが含まれていることも興味深い。